

高商生の泰安亜行～Bon voyage！¹⁾

——20 世紀前期高等商業学校が実施した海外修学旅行の妙趣——

阿 部 安 成

■いまからおよそ 100 年まえの 20 世紀初頭に、大量の人びとが日本列島から朝鮮半島、台湾、中国大陸へと渡航していました。わたしたちの多くが海外へと出かけるたくさんの機会を手にしたのは、おおよそ第二次世界大戦後の高度経済成長期だと感じているひとが多いだろうとおもいます。少し以前のこととなる 2006 年の 3 月 24 日付『朝日新聞』朝刊に、1964 年の海外観光渡航の自由化以後、多くの日本人が外国へゆくようになったという内容の投書が掲載されました。しかし実際にはそれよりもまえに海外への大量のひとの移動がありました。わたしたちはこの事実を忘れてしまったのです。きょうの講演は、この忘れられた事実から始めることとしましょう。

海外渡航をめぐる、戦後の高度経済成長期、あるいはバブル時代のころの現代並みといえるようすが 20 世紀初頭にあったというものの、現在と当時とでは国境線の位置が異なるという大きな違いがあります。いまから 100 年まえには、台湾も朝鮮半島も日本の版図となっていました。そのころに海外へ渡航した人びとのなかの十代の青年たちが、きょうのお話の主人公となります。修学や調査を目的とした高等商業学校の生徒たちの海外旅行をとりあげます。

1) 本稿は 2012 年 11 月 2 日に一橋大学附属図書館企画展示「旅する高商生たち—明治・大正期の修学旅行報告書」（11 月 1 日～16 日）の関連企画としておこなわれた講演会「高商生の泰安亜行～Bon voyage！—20 世紀前期高等商業学校が実施した海外修学旅行の妙趣」の報告原稿に加筆修正をくわえた稿であり、2012 年度経済学部学術後援基金助成「高等商業学校における語学教育と調査実習についての実証研究」と 2012 年度科学研究費補助金基盤研究（C）「20 世紀前期の帝国日本における実学実践と教養主義をめぐる文化研究」（課題番号 24520746）による成果の 1 つである。



講演題目につけた「泰安亜行」は、わたしの造語です。ただこれには元があつて、細野晴臣というミュージシャン（ベーシスト）が出したソロアルバム『泰安洋行』（クラウン、1976年）からの借用になります。ただこれは細野さんの造語ではなく、彼は、長崎の中華街にある雑貨店の名をそのまま自分のアルバム・タイトルとしたのです。毛沢東のバッヂやパンダのぬいぐるみ、レトロな絵柄の絵葉書、スリットのはいったチャイナドレスなど雑然と並べられたおもちや箱のような店内のようすに似て、『泰安洋行』というアルバムはエキゾチックな、しかしナショナリティ不詳の、どこか風の音楽ではあるけれども出自がわからないといった曲のまとまりとなっていました。長崎中華街の雑貨店泰安洋行も、中国製かもしれないけど日本向けの製品に違いないという代物が並んでいました（中国でももう売れないものもあっただろうけど）。

アルバム『泰安洋行』には、本物とはなにかしら違うというオリジナリティがつまっています。この「本物とはなにかしら違うというオリジナリティ」がアルバム『泰安洋行』を組み立てている核心になります。アメリカ人が作曲したちょっとずれた中華風の音楽を、日本人である細野さんがまたずらすといった手法です。この「ずれ」は、自分たちが馴染んだようすと異なるものへの驚きの感情を生み出し、そこへ人びとの興味や関心を吸引してゆきます。興味渦巻くその「ずれ」は、またあらたな好奇心や探究心に力を与えます。この仕組みを細野さんがおもしろがっているようすをアルバム『泰安洋行』はあらわし、それを聞くものがまた楽しんできたのです。もっともこのアルバムはごく少数の人びとにしか受け入れられなかったようすが。

細野晴臣というミュージシャンは、この「ずれ」がつくりだすどきどきやわくわくを大切に、のちに坂本龍一、高橋ユキヒロと Yellow Magic Orchestra を結成するときに、「頭クラクラ みぞおちワクワク 下半身モヤモヤ」の表現で YMO の音楽を説明することと

なります²⁾。

この、どきどきするような驚きや、わくわくしちゃう好奇心、くらくらする陶酔、そしてそれらの感情がなにを造形してしまうのか、を高商生の海外修学旅行を考えるとときの観点におこうとおもって、細野さんのアルバム・タイトルを借用して「泰安亜行」と名づけてみました。

■「洋行」といったばあいのゆき先は一般に欧米ですが（もっとも「泰安洋行」が雑貨屋の名だったことにあらわれているとおり、「洋行」には商店の意味もありますが）、ここではわざわざ「亜行」としました。いま一橋大学附属図書館で開かれている企画展示「旅する高商生たち—明治・大正期の修学旅行報告書」でも、「海外での調査」の項が立てられて、「明治30年代に入ると、修学旅行は海外でも実施されるようになった。〔中略——引用者による。以下同〕明治38（1905）年以降に修学旅行に選抜された学生のうち、およそ半数が海外での調査に従事した。〔中略〕日露戦争後の変化は明白である。学生たちの調査先は、台湾、朝鮮半島、中国東北部、長江流域、さらには香港やフィリピンにまで及んだ」と説かれているとおり、20世紀に入って創設された高等商業学校の修学旅行は、国内にくわえてその渡航先をアジア、より厳密にいうと東アジアとしていました。「東亜行」ではおちつきがわるいので、「亜行」としたしだいです。

ここで、亜行にでかけた高商生が属する高等商業学校（以下、高商、と略記する）についてかんたんに説明しておきましょう。一橋大学の母体となった東京高商、その前身である「高等商業学校」が設置されて以降、各地に高商がつくられました。順番にその名をあげると、山口、長崎、小樽、大分、福島、彦根、和歌山、横浜、高松、高岡となり、また、外地の台北、台南、京城にも高商がたてられました。内地の高商は現在では、国立大学法人の経済学部、あるいは単科大学となっています。なお、東京、名古屋、神戸にも高商が設置されましたが、それらははやくに大学に昇格してしまったため、高商といったばあい

²⁾ 細野晴臣のつくる音楽の仕組みについては、細野へのインタビューによって構成された細野晴臣ほか編『細野晴臣インタビュー—THE ENDLESS TALKING』（平凡社、2005年、元版1992年）を参照。

にとりあげられないことがあります³⁾。

かつて13校あったこれらの高商は、帝国大学とは異なる固有の高等教育機関としての機能を果していました。その役割の1つが、実業につながる実学の教育でした。20世紀初頭当時に勃興しつつあった企業や商社などをささえる人材育成を担った高商は3年制の教育をおこなう男子のみの学校でした。

これらの高商にはいくつかの共通項があります。たとえば、当時の同窓会組織が現在の経済学部などの卒業生をも束ねていること——東京高商から一橋につながる如水会、彦根高商から滋賀大学経済学部への陵水会（ここにいう陵は彦根城を、水は琵琶湖を指しています）、小樽高商から小樽商科大学への緑丘会、長崎高商から長崎大学経済学部への瓊林会などです。

それから講堂。この国立キャンパスにある兼松講堂の重厚感と違って、高商の講堂はその多くが木造で、手のひらに乗りそうなど形容したくなるこぢんまりとした佇まいを醸しだしていました。この高商の講堂はいま、彦根にただ1つ残っているだけです。彦根城を背に、また、お濠の水の反射をガラス窓に映す彦根の講堂は、なかなか素敵な高商以来のシンボルとなっています。



そして、調査課や図書課といった部局。前者は高商によってその名が異なるセクションで、これが現在の一橋大学経済研究所や、滋賀大学経済経営研究所につらなります。もう1つの図書課はそれぞれの大学の附属図書館へいたりします。調査課など

は、図書課と異なる分類法によって収集資料を整理し、図書課のあつかう対象とならない

³⁾ 飯島渉は「横浜高商が第11高等商業学校として開校した」と記したとき第1から第10までの高商に台北、台南、京城を数えてもそこに東京、名古屋、神戸を入れない数え方を紹介している（「旧制横浜高等商業学校収集資料について」『横浜国立大学経済学部附属貿易文献資料センター所蔵旧制横浜高等商業学校収集資料目録』横浜国立大学経済学部附属貿易文献資料センター、2001年）。

報告書などの文献やポスターなども収集した調査と資料収集と研究をおこなう機関でした。

■この高商はいま、世のなかできちんと認知されているとはいいがたいとわたしは感じています。かつてわたしが取得した外部資金において、わたしの研究題目にあった「高等商業学校」という語が「商業高等学校」にかわっていました。それほどに高商の認知度が低いといえるでしょうし、また一方で高商を母体とする国立大学法人の経済学部においても、みずからの歴史をきちんととらえようとしない傾向があるようにおもいます⁴⁾。

滋賀大学経済学部は来年創立 90 周年を迎えます。長崎大学経済学部、山口大学経済学部、小樽商科大学は数年まえに創立 100 年のときを数えました。いずれも数のかさ上げのようなところがあって、90 周年や 100 周年というのは学部設立からの年数ではなく、どこも母体となった高商創立時を始まりとした年の数え方をしています。このようにどこも高商からの歴史を自分たちの学部のアイデンティティとしているわけですが、しかし、きちんとそれにみあう歴史の編纂をおこなっているかという、それはかなり怪しい事態となってしまいます。

創立 100 年を記念してきちんと大学史を編んだところはさきの 3 つの学部と大学という小樽商科大学だけとなります⁵⁾。しかも小樽商大は、母校出身ではない外部研究者にも執筆を依頼するというかなり思い切った、したがって秀でた編集方針をとったと評価できます。(余談を記すと、そこに執筆した外部研究者に滋賀大学経済学部の教員が 2 名ふくまれています。百年史編纂にかかわる逐次刊行物もくわえると 4 名の滋賀大学経済学部のスタッフがそれらに執筆しています⁶⁾。それもあって、「秀でた」という形容はその内容には

⁴⁾ その一方で、たとえば岩波講座『「帝国」日本の学知』(岩波書店)においてその第 6 巻「地域研究としてのアジア」(2006 年)に松重充浩が「戦前・戦中期高等商業学校のアジア調査—中国調査を中心に」が収載されたとおりに、シリーズ講座に収められた 1 編の主題が高商となったり、橘木俊詔『三商大 東京・大阪・神戸—日本のビジネス教育の源流』(岩波書店、2012 年)で高商が着目されたりといった動向もある。

⁵⁾ 小樽商科大学百年史編纂室編『小樽商科大学百年史』通史編、学科史・資料編(小樽商科大学出版会、2011 年)。

⁶⁾ 阿部安成「小樽高商の海外修学旅行記録」(前掲小樽商科大学百年史編纂室編『小樽商科大学百年史』学科史・資料編)、菊地利奈「大正期の小樽高商における文学色—小林象三、高浜年尾、伊藤整を中心として」(同前)、江竜美子「史料整理の実務 戦前期文献の資料整

なく、あくまで編集方針にむけて使いました。いや、それでも自画自讃になってしまうでしょう)。

こういういわば歴史意識の薄弱化を指摘しながら、その当人が属する滋賀大学経済学部はどうかというと、およそ10年まえの創立80周年のときには小さなパンフレットをつくりましたが⁷⁾、今回はそれすらもつくる気配はありません。100周年のときに盛大に事業をおこなうからという言い訳もできるでしょう。わたしは大学とはべつに彦根のキャンパスから創立90周年をきっかけとしたなんらかの発信はする予定ですので、なにも歴史を知ったり記したりすることは、かならずしも大学当局がおこなわなくてはならない事業ではありません。とはいえいまの大学や学部の長にとって歴史とはなにか額縁に入れて飾るような章 (badge or emblem?) であっても、それにむきあう対象ではないようです。

■高商がいまとなってはあまり世のなかの関心をひかなくなっているところで、高商に在籍した生徒の痕跡も大切にあつかわれているとはいいいがたいようがあります。たとえば、生徒が執筆した論文や報告書については、それを保有している国立大学法人の経済学部がいくつもあります。ある学部は、それが汚れているという理由で非公開としています。もとよりそれらの執筆者のほとんどがすでに故人となっているわけですから、その保護すべき個人情報もかぎられているはずです。高商に在職した教官の著作は大切に保存し、かつ公開をしても、生徒の執筆したものは段ボール箱に入ったままという事態は、史料に対して失礼なあつかいだとわたしは感じます。

今回の一橋大学附属図書館企画展示でみられる高商生の報告書などは、いまでは附属図書館貴重資料室で保管されていますが、かつては閉架とはいえ書庫内では自由に閲覧も複

理から」(『緑丘アーカイブズ 小樽商科大学百年史編纂室ニュース』創刊号、2005年3月)、阿部安成「所蔵資料の保存と公開」(同前)、菊地利奈「大学史編纂・大学アーカイブズ 小樽高商の英語教育：英語教師小林象三のこと」(同前誌第10号、2009年9月)、坂野鉄也「高等商業学校とスペイン語教育」(『小樽商科大学史紀要』第5号、2012年3月)。

⁷⁾ 滋賀大学経済学部創立80周年記念展実行委員会編『80年の歩み－彦根高等商業学校から滋賀大学経済学部』(同会、2003年)が滋賀大学経済学部附属史料館の企画展示の展示図録としても発行された。

写も可能でした。これらの生徒執筆報告書は現在、「高等商業学校・東京高等商業学校・東京商科大学学生調査報告書（通称 修学旅行等報告書）」として一括され、検索可能な目録も整えられ、附属図書館ホームページの当該資料のところで、「解説」「伝来」「整理の経緯」も示され、さらにはデジタル化された画像をみることもできるようになっています。まさに隔世の感といってよいようです。こうした作業は容易にできることではありません。予算の獲得に始まって、実際に作業を進めてゆくとなると当然のこと、報告書の 1 点ずつを手にとって、その書誌をできるだけはやく、かつ的確につかまなくてはなりません。またそのつかみぐあいは、報告書の全体に貫かれていなければなりません。わたしも、彦根高商の生徒が執筆した論文や報告書の目録をつくりかけましたが、まだ完成にはいたっていません。自分ができなかつたからというわけではありませんが、一橋大学附属図書館のこうした地道な目録づくりの作業に深い敬意を表します。

かつては、報告書に記された、ある地域のある出来事や状況についての情報を得るためにこれらの報告書が活用されたといつてよいでしょう。いまや附属図書館のホームページでは、「関連情報」として「図書・論文」も掲げられて、これらの報告書を高商史や 20 世紀初頭の高等教育機関が実施した、調査や旅行の歴史のなかで読むための手立ても示されたのです。目録作成やデジタル画像化といった閲覧にむけてのあらたな整備が、報告書という史料を活用する枠組みもかえたといえるのです。

■そしてこれらの報告書が作成されるそのきっかけとなった調査や修学のための旅行は、これもまたその中身も意義もほとんど忘れられたといつてよい歴史となっています。たとえば、小樽商科大学の小樽高商史研究会が編集した『小樽高商の人々』（小樽商科大学、2002 年）では、挿し絵としての写真が当該頁についているものの、わずか数行で小樽高商の修学旅行を記してよしとしていました。高商の海外修学旅行は、ときに 1 か月以上にもわたって数十人の団体で東アジアの各地を巡遊した高商のビッグ・プロジェクト、ビッグ・イベントだったので、高商史においてそれにゆったりとした紙幅をあてて記述しないことが、わたしにはとても奇異に感じられました。小樽商科大学附属図書館では一橋大学附属

図書館ほどではないにしても、生徒執筆の論文や報告書について閲覧しやすく整えられているのですから、「小樽高商の人々」として高商生をとりあげるのであれば、もっとべつな記述のしようがあったのではないのでしょうか。ただ、きちんと高商の歴史を記した創立100周年記念の史誌に海外修学旅行の記載があるので小樽はよいほうで、新制大学設立以後に刊行されたそれ以外の高商史ではまず、海外修学旅行の記述はほとんどありません。

なぜそうってしまったのか——おそらくその理由でもっとも重要な点は、高商の海外修学旅行についての史料の入手が困難であったり面倒であったりすることなのかもしれません。海外にかぎらずとも修学旅行をめぐる高商の文書（いわゆる一次史料）は、驚くほど残っていません。高商によってその多寡が異なりますが、校内の学友会など、あるいは学外と同窓会が発行した逐次刊行物に掲載された記事や、地元紙の紙面を丹念におってようやくわずかな断片の記述を得られるていどでもあります。また、いわゆる卒業アルバムにも点数は少ないかもしれませんが、海外修学旅行時の写真が掲載されていることがあります。もっともそれらは、ただの1枚1枚にすぎず、またキャプションがついていないことも多く、史料としてそれなりに活用するためには、写真にみあったくふうが必要となります。

断片の、希少な史料を活かすには、このくふうが欠かせません。たとえば、海外修学旅行にくわった教官や生徒の名がわかるのであれば、そしてその教官や生徒の執筆した文章が残っているのならば、その教官の著作物、また生徒の論文や報告書、学内での研究会やクラブ活動のようす、さらには生徒の履修科目（語学はなにを選択したかなど）、卒業後の就職状況をたどり、それらをつきあわせて、海外修学旅行を軸とした教官と生徒の像を構築することができるかもしれません。

■こうした観点からの探索を、彦根高商をフィールドとして少しだけ、サンプル調査ていどにやってみたことがあります。その暫定の結果は、あまり相互の関連がみられないとなりました。たとえば、学内の海外事情研究会で活動していた生徒が海外修学旅行にくわったものの、その体験を活かした卒業論文や調査報告書を書いたわけではないし、卒業後

に渡航先の企業に就職したということもはっきりとした傾向としてとらえることができませんでした。これをわたしは、「脱臼」と表現したことがあります⁸⁾。一見、ひと連なりのまとまりが企図されたようにみえながらも、その内実につながりはない、あるいは切断されていたり挫いていたりするようすを身体の脱臼になぞらえたのでした。

ただしこの観点からの成果をより確かなものとするためには、1校のなかでもサンプル数を増やさなくてはならず、また、複数の高商のようすをみなければなりません。難点は、それぞれの高商で史料となりうるテキストの残り方が異なっているというところにあります。東京高商、小樽高商、彦根高商の生徒が執筆した手書き原稿はみられても、山口高商や長崎高商ではそれができない、という偏りがあります。

なお、彦根高商をフィールドとしたときの外地と生徒のかかわりについて、暫定のおおまかな見通しを示すと、卒業後すぐの就職は内地の企業や会社にしたけれども、転職を重ねるなかで外地に就業を展開していったという動向をはっきりと指摘できるかどうか論点になるとみています。この観点はほかの高商にも適用できるかもしれません。ただし、どこの高商にも残っている『学校一覧』の記載事項がかならずしも一定していなくて、ある時期までは卒業生の就職先、所属会社が明記してあるが、それがあるときからなくなってしまうという難点があります。同窓会組織の名簿もきちんと連続して残っているばあいは、あまりないことでしょう。

高商の歴史を考えてゆくには、このあたりまえともいえる、史料の残りぐあいが高商史の方向、領分、観点、論点などを判断する要諦となっているようすに留意する必要があります。

■では、高商が実施した海外修学旅行の具体相をみてゆきましょう。ここでとりあげる高商は、山口（1905年第1回入学式挙行）、小樽（1911年同前）、彦根（1923年同前）、高岡（1925年同前）です。これら4校のすべてにおいて、第1回の入学生が3年生になったと

⁸⁾たとえば、阿部安成「〈彦根高商〉という歴史への問い—修学旅行という出来事」（京都市科報告、2004年12月11日）など。

きに、海外修学旅行を実施しています（1907年、1913年、1925年、1927年）。多くの高商で修学旅行の担当部局は学務課などとなっているものの、その詳細な規程や要領が『学校一覽』に載っていないところもあります。実施要領がはっきりと定まっていなくて、多くの高商で海外修学旅行が実施されていたという不思議さがあります。

そうしたなかで、山口高商は1908年度に山口高商細則に第12章として「修学旅行」の規則を設けました。そこで、この修学のための旅行を毎年春季に1回実施すること、この旅行への欠席は罹病などの重大な事由にかぎること、旅行先を学年によってわけ、第1学年は中国または九州、第2学年が阪神または京浜、第3学年を「清韓地方」とすること、課題として「視察報告書又ハ紀行文」を提出すること、その評点を学年末試験点に加算すること、旅費として8月をのぞいて毎月2円ずつ納付すること、が定められました。

のちにこの細則の一部があらためられ、第3学年の旅行先が「朝鮮又ハ支那」（1912年度）へ、その後にも「支那朝鮮又ハ東京地方」（1917年度）となり、第3学年のみに修学旅行が課されることとなった1919年度には、そのゆき先が「支那朝鮮又ハ内地」となります。第3学年のみ実施となったそのときの旅費は、第2学年までに総額22円を三分割して積み立てることも定められます。

■海外修学旅行の目的はどこにあったのでしょうか。山口高商では、「満支朝鮮方面へ修学旅行団を派遣せしは、満韓経営を教育方針の一とせる本校の使命に副はんが為であつたことと言ふ迄も無い」と、のちに校史にまとめられることとなります⁹⁾。確かに山口高商では、その「本校設立当時ノ教育綱領」として、「一、少壯者ヲ出スコト／二、徳育ニ重キヲ置クコト／三、實際的ノ人物ヲ養成スルコト／四、満韓経営／明治三十八〔1905〕年五月」が掲げられたとの記載がある記録が残っています¹⁰⁾。学校の方針にある「満韓経営」の使命を果す一環として「満支朝鮮方面」への海外修学旅行を実施したというのです。もちろん

⁹⁾ 『山口高等商業学校沿革史』（山口高等商業学校、1940年）。

¹⁰⁾ 「山口高等商業学校」の名が入った縦罫紙に墨筆で記されたこの文書は、山口大学経済学部東亜経済研究所所蔵の『山口高等商業学校大学予科一覽 自明治三十八年至明治三十九年』（山口高等商業学校、1905年）に挟まれてあった。山口高商第1回入学式がおこなわれた1905年5月の時点で記された文書ではなく、後年のものと推量される。

高商生がただちに「満韓経営」をおこなえるはずもなく、それを担い得る人材育成のためのいわば事前研修が海外修学旅行だということなのでしょう。

こうした卒業後をみとおしたうえでの実地研修の意義を海外修学旅行につけた高商はほかにもあります。小樽高商の第1回海外修学旅行の一行にむけられた校長渡辺龍聖からの送辞が、「卒業期の近い一行に取って「嫁入の見合に行く様なもの」になぞらえられる「^{すべきゆれいしよん}投機」だと告げる内容だったとの報道が、地元紙の『小樽新聞』（1913年9月12日）にみえます。男子校ならではの喩えによって、婚活ならぬまさに就活の一端だと海外修学旅行がとらえられています。

彦根高商でも同様に、「正課に準じて課するものにして、卒業後活躍の地域の一としての満洲国の経済事情を実地踏査さしめ、東亜共栄圏の一環たる本地域の重要性を認識、体得せしむるを以て目的とす」と海外修学旅行（ここでは「研究旅行」）の目指すところが示されています。このときの旅行は、1942年3月卒業見込みの東亜科第3学年生51名を対象に企画されました。東亜科とは、1939年に設置された支那科が1941年に改称された特別カリキュラムの名称で、この研究旅行はその支那科第1回入学生にして東亜科第1回卒業生となる生徒が対象だったこととなります。

高岡高商生徒が海外修学旅行ののちにその目的を「商業状態を視察に行く」と記した例もあるとおり（鈴木真一「満蒙の夏をたづねて」『学友会雑誌』第3号、1927年9月）、修学旅行の実態は視察や調査にほかならず、そのねらいとするところは多くの高商に共通して、いわば卒業後の糧を事前に準備するという事だったのでしょう。

■こうして高商生たちが、海をこえて動き始めます。海外修学旅行の行程や規模をみておきましょう。

まずは山口高商第1回海外修学旅行。これは1907年5月23日から31日間におよぶ教官2名と生徒28名の旅行で、釜山、大邱、京城、仁川、大連、旅順、營口、奉天、安東県、平壤、仁川、群山、木浦、釜山をめぐりました。山口高商では1911年実施の第5回海外修学旅行までこの第1回とほぼおなじ旅程が設けられます。その翌1912年には、「初めて支

那本土へ向ひ」と記録された、上海、杭州、蘇州、南京、漢口、武昌、上海にゆく5月11日から33日間、4名の教官が80余名の生徒を引率する大旅行となりました。

つぎに小樽高商第1回海外修学旅行。これは1913年7月11日から8月7日までの教官2名と生徒24名による「ウラジオストック、朝鮮、日本一周の修学旅行」となった¹¹⁾。ウラジオストックに6日、京都に3泊、それ以外のところは1泊ずつの旅行では、「内地」をたっぷりとみる旅程を組んで、長崎高商、山口高商、神戸高商、東京高商にも寄っていました。この大旅行は、地元紙の『小樽新聞』でも全45回の長期連載としてとりあげられました。記事のタイトルは「環行三千哩」。このうちの第22回以降が、内地の記事となっています。



ます。これだけの連載記事となったのですから、小樽にとっても地元の高商の海外修学旅行は大きな出来事と受けとめられたことでしょう。

彦根高商の海外修学旅行を概観しましょう。初期の旅程は、華南、台湾、南洋（フィリピン）を目指しましたが、それ以降は、朝鮮半島、満洲、北平あたりが定番の行程となって、1930年代には修学旅行以外の派遣もふくめると、ほぼ毎年生徒のどれかしらが東アジアへと渡航していました。長いときで1か月あまり、ただ規模はそう大きくはなく、引率教官が1、2名で、生徒は多い

ときで13名、少ないときは0、つまり教官だけでいった修学旅行というときもありました。

高岡高商の第1回修学旅行をめぐっては、生徒による「満鮮の夏をたずねて」と題され

¹¹⁾ 緑丘五十年史編集委員会代表大野純一編『緑丘五十年史』（小樽商科大学、1961年）。

た紀行文が残っています。(鈴木真一執筆。『学友会誌』第3号、1927年9月)。そこには、神戸から長春までの切符を買ったこと、釜山から京城へゆく車中でロシア人とロシア語で会話をしたことが記されています。

学校によって、時期によって、この海外修学旅行の規模は異なります。彦根高商の生徒が0になってしまったときがあれば、山口高商の参加生徒80余名といった大旅行団まであります。1か月にもおよぶこの海のむこうへでかける修学旅行の費用は、どのくらいだったのでしょうか。

彦根高商の記録ではひとり220円かかったとなっています。これを現在の額に換算するのはなかなかむづかしいので、彦根高商の授業料を参照すると、1学年50円でした。入学してから卒業するまでの3年間の授業料総額よりも高額だったとは、これはかなりの費用だったこととなります。

■高商が実施した海外修学旅行のおおよその定番行程は、神戸または門司から汽船で釜山、あるいは大連へゆき、それぞれに北上して朝鮮半島を縦断したりいわゆる満鉄(南満洲鉄道)に乗ったりして満洲に入り、奉天、長春(新京)、哈爾濱へと到るコース。あるいは、大連、旅順などを経て山海関をこえて北京(北平)へとまわるコース。また、台湾と朝鮮半島をめぐる行程や、彦根高商のように台湾から華南を経てフィリピンにまで渡る旅程もありました。

1912年設立のジャパン・ツーリスト・ビューローは、ただちに東アジアに営業を展開し、同社が高商の海外修学旅行にかかわるばあいもでてきます。こうした20世紀初頭のツーリズムのうえに高商の海外修学旅行は成り立っていたわけです。また、高商間でもお互いに修学旅行についての情報を交換しあっていたようすが記録に残っています。いまでも旧高商系12大学の学部長会議などが開催され、お互いに他校のようすに注目しているのと同様に、会議の開催はしないまでも、高商同士のあいだでさまざまな情報伝達をおこなっていたようです。旅行会社が企画したパッケージや、高商間でおこなわれた情報共有によって、おそらく海外修学旅行の旅程は、大連、旅順、釜山、京城、奉天、新京、あるいは撫順の石

炭露天掘りや鞍山の製鉄所などといった似たり寄つたりの旅程となったことでしょう。高商というと金太郎飴のようなのだとの、あまりはっきりとした根拠のみえない判で押しつけたような決めつけがおこなわれるばあいがあります。こうした定型の海外修学旅行行程も高商金太郎飴の 1 断面にみえるかもしれません。

そうしたなか、さきにみたとおり、小樽高商の実施した海外修学旅行には、まず進路をほぼ真西にとってウラジオストクへむかうという他校に例のない特色がありました。小樽高商のあった小樽区稲穂町(当時)もウラジオストクも北緯 43 度です。こうした独自性は、どういう航路があったのかという当時の交通のありようともかかわっているでしょう。ウラジオストクから当時のいいかたをあげれば「北鮮」へ、地名でいうと清津への航路がこうした旅程を可能としたのです。もっとも、ウラジオストクへの渡航は、1910 年代の後半になると、「戦時状態」「騒擾の状態」を理由にして樺太や、南満洲から朝鮮へと変更されることとなります。

彦根高商でも、それが実現したかどうかはまだよくわからないながらも、1941 年の修学旅行では、敦賀から日本海を北上して羅津へ渡り、そこから満洲を南下して大連から戻るといった行程が予定されていたとの記録があります。日本海の航路も重要で、高岡高商では 1935 年の教官 2 名と生徒 3 名の修学旅行では、伏木から日本海を北上して雄基へ、そして清津、会寧、図們、新京などおよそ 40 日をかけてめぐり、また天候により実現しなかったものの、高岡高商の 1936 年の修学旅行も当初は、高岡から伏木へ行って船に乗り、敦賀、萩を経て釜山にむかう旅程が予定されていました。このとき実際には、「平凡の下関経由」となってしまう、関釜、京城、平壤から金剛山(ただし「外金剛」だけのこと)、清津、羅津といった朝鮮半島東側を北上するめずらしい行程をとって、それから吉林、新京、哈爾濱、奉天、撫順、鞍山、大連、旅順と後半は定番コースをとる修学旅行となりました。なお出立にあたって、下関では「満鮮ラツシユ」というほどの混みぐあいで、予定していた船に乗ることができず、「下関に一泊」する破目になった、それほどに「満鮮」への旅行が混みあっていたというわけです。

こうした旅程からは、当時かならずしも主軸の航路とはいえなかったかもしれないけど、

また、いまでは実感がなかなかわきにくくなってしまった、日本海（これもまたわれわれに固有の呼び名なのでしょう）の航路を考えるきっかけとなりますし、それぞれの高商の交通圏や高商にとっての地域を考える重要な要素となるようにおもいます。

なお、この外金剛を観光した高岡高商の 1936 年海外修学旅行は、教官 2 名（うちひとり配属将校）と生徒 4 名で 7 月 19 日から 20 日あまりの日数をかけ 150 円くらいかかったとのこと。1935 年から 3 年生むけの「満洲事情」という新カリキュラムが導入されたこともあって、さきにみた旅程が組まれたということです（細野日出男「鮮満旅行の記」『高岡高商同窓会誌』第 16 号、1936 年 11 月）。

■このときには旅先の各地で高岡高商の卒業生を訪ね、その数じつに各地にいる 110 余名の同窓生のうちの半数にちかい 50 名に会ったということです。

汽船、鉄道、ホテル、旅行会社といった手だてが整っていなければ規模の大きい海外修学旅行の実現は困難になります。これにくわえて、海外修学旅行を円滑に実施するには、外地にいる卒業生の数と質が重要となります。食事をするところ、泊まる場所、見学する場所などを現地の OB が手配しているようすし、また、渡航先で官公庁の官吏や企業の社員による講演を催すさいにも、そうした OB がうまく機能したようすがうかがえます。

高岡高商では、さきにみた修学旅行が実施された直後の 8 月下旬に、同窓会の台湾支部が発会しました。このように多くの高商で同窓会組織の支部が外地にもつくられてゆきます。各高商の外地における同窓会支部を総体としてみてみると、それはかなりの規模となり、また機能を有していたのではないのでしょうか。こうした観点からの高商の歴史は、まだほとんど把握されていません。

かつて 2005 年に、滋賀大学経済経営研究所第 1 回インターネット企画展において彦根高商の海外修学旅行をとりあげたとき、それを報じた新聞記事¹²⁾を読んだ彦根高商 OB で、まさにその修学旅行に参加した方から研究室にお電話をいただき驚いたことがありました。

12) 「アジア修学旅行紹介／旧制彦根高商が戦前に 12 回」『朝日新聞』2005 年 11 月 15 日朝刊滋賀欄。この企画展については『日本経済新聞』2005 年 10 月 22 日朝刊文化欄でも「知られざる大修学旅行」の見出しで報じられた。

その方はわずか3名しか参加しなかった旅行のときのおひとりでした。電話をくださったそのとき90歳前後のご高齢で耳はだいぶ遠いものの、いろいろと当時のことを話してくださいました。旅費が高額だったことをいまも覚えていらっしゃるとのことでした。また、数年まえに彦根高商から滋賀大学経済学部に来る同窓会である陵水会の東京支部に、総会の記念講演者として招いていただいたとき、200名ほどの出席者のなかにたったおひとりだけ彦根高商の卒業生がいらっしゃいました。

でも、さきの海外修学旅行参加者のOBは数年まえにお亡くなりになりましたし、彦根高商創立からおよそ90年、高商がなくなってしまったときからだいたい70年になろうとしているいまなのですから、外地の同窓会支部に属していたOBからの聞き取りもだいぶむづかしくなっていました。

■高商生たちは海外修学旅行において、なにをみたのでしょうか。1つの重要な点は、戦跡と動乱の光景です。山口高商の第1回海外修学旅行の実施は1907年でしたから、日露戦争直後の旅順にいています。戦後10年を経た時点でも、旅順の爾霊山での感想を「土中にはまだ戦死者の屍が残つてゐるのだ」と記した高商生もいます（『満鮮修学旅行日誌』『学生会報』第57号、1917年7月）。

また、1936年の海外修学旅行に参加した高岡高商生は旅先で、「満洲帝国」に入ったならば、「がらりと変る満洲気分、それと共に加はる厳粛な準戦時的な厳戒の雰囲気」を「是等独特の国境気分」としてあらかじめ感じとりましたし、調査や修学を目的とした海外旅行は山口高商では1939年までおこなわれ、さきにみたとおり彦根高商では1941年の海外修学旅行が計画されました。実施初期の1900年代には跡というにはいまだ生々しい戦跡を訪ね、1930年代末には軍隊によって匪賊の襲撃からまもられるなかでの移動があり、ゆき先で「準戦時」を感じるような体験を、高商生は海外修学旅行をとおして得ていました。ただしこの様相についてはここでは省略することとします。

■高商生がみた海外修学旅行の光景として、ここではまず、満洲の平原をとりあげてみま

しょう。見渡すかぎりの地平線、地平線に沈む夕陽、遙か地平線にまでつづく高粱畑といったたぐいのありきたりの形容でしばしばあらわされる光景をまえにして、高商生の視界が開けてゆくようすをみましょう。

高岡高商生は奉天の百貨店吉順糸房5階バルコニーやその建物の「頂上」にのぼって、「一望千里眼」を得ただの「市街を一望の裡に眺め、奉天のアウトラインを掴んだ」だのと記しました（八島美一「満鮮旅行記」『学友会誌』第5号、1929年12月、幸道武志「満洲の夏を訪ねて」『志貴野』第16号、1936年2月）。このいわば「一望」を可能とする目は、建物の5階にのぼらずとも得られ、奉天へむかう列車のなかでも「一望無辺の平原」と記せるのでした。同様に地上にいても「顧望千里」「雄大無比」といった言葉で、「何とも云へぬ大きな眺め」が表現されています。こうした内地ではむつかしい壮大な視野を得るという体験は、2つの方向へとその高商生の心性をひろげます。

1つは、「午前八時哈兒濱を出た此の列車は車窓からの目欲しい風景とて一つもない様な涯のない曠野を驀進する。安達、昂々溪間は水草のある湖水さへ所々あるも、駅附近を除く外は全く荒寥無限の荒地である。それはものすごい位広いと云ふよりも、現実から遠く離れた神秘的な色に満ちた静な風景である」といった、現実とは異なるフィクショナルな幻想の心象風景に。そしてもう1つが、「一望千里〔中略〕満蒙の大平原」に埋蔵する富を想像しながら、「日本は此の満蒙のために日支両国のために満蒙を守護し、開拓し、人類の福祉に寄与し、貢献する責務を負ふてゐるのである。之等の大きな使命」という、現実のようすを大きく拡大させ超越した規範意識へとひろがるのです。

ひとが眼前にした光景を表現するとき、どういう形容がふさわしいのでしょうか——さきにとりあげた、奉天吉順糸房バルコニーからの景色をみた感慨——「市街を一望の裡に眺め、奉天のアウトラインを掴んだ」との表現が適切なのであって、現実に見える光景はかならずアウトライン=輪郭で縁取られているはずなのですが、その広大さゆえに「無辺」の「涯のない曠野」と、高商生たちは目のまえのようすをついつい喩えてしまうのです。このレトリックが、重厚な責務や深甚な使命を自分たちが、あるいは日本が担えてしまうような気分につながるのです。高商生のどきどき感がひろがりをもってゆきます。

■この、「一望」という視界は、それをみるものの視野に「大陸」をおさめることになりません。正確には、大陸に立つ、といえても、大陸をみた、とはいえないはずで、大陸のある区切られた部分をみたとはいえても、超高度に位置する目を持たないかぎり大陸のまるごとをわたしたちはみることができません。高商生たちはしかし、大陸をみた、と感じたのです。

2 日間の航海ののちに長江沿岸の中清地方へ上陸しようとするとき、「支那大陸を初めて見て、雀躍するを禁じ得なかつた」と記した山口高商生がいます（「中清紀行（一）」『学友会報』第34号、1907年4月）。「長江遡江」の船中からも、「森々漠々たる長江に、始めて大陸気分を味ふた。見渡す限り果てしなき平原、紫にかすむ蜒々たる山丘、〔中略〕その大陸的茫漠土は、我々日本人には実以て、立派な心の良薬である」との大陸気分にかかわる日本人意識が高商生の心象に登場します（「遊支日記」『学友会報』第61号、1919年7月）。あるいは、上海上陸まえに、「やがて雲烟模糊の裏に青一髪の陸地が見えて来た。おゝあれが亜細亜大陸か」と興奮するのも同様です（「南支那旅行記」『学友会報』第52号、1914年7月）。大陸をつかんでしまう高商生の眼力は、「支那だ支那だ大陸だ、赤露のモスコーとも仏蘭西の巴里とも続いて居る大陸だと心に叫」ばすほどにもなります（「大陸の味象」『学友会報』第63号、1920年12月）。

他方で、大陸をみてしまった目が、どうしても「日本は矢張小さいと思」わしめてしまうばあいもあります。奉天から朝鮮半島を南下して帰校した生徒はそう記さざるをえなかったのです（「奉天まで」『学友会報』第55号、1916年7月）。日本の小ささを知るものは、自分たち日本人の卑小さにも自覚がおよんでしまい、だからこそ大陸を目のまえにしたと実感しうるとき、「此の雄大なる風光に接して誰れかは勃々たる雄心を起さざるものあるべき、余が島国的胆ッ玉は急に膨張して、我が活動舞台の大なるを狂喜」することにもなるのです（前掲「中清紀行（一）」）。

彦根高商生もまた、「兎に角これでアジヤ大陸の一角に我々の足跡を印したのだ。その地続きは歐洲大陸であると思へば一層異国の旅にあると云ふ意識を深くした。そして憧憬の

香港へとむきあふのである」(1926年、仙頭への上陸にさいして)、「欧洲大陸に続いてある朝鮮に着くとはうその様な話した」(1927年、朝鮮にて)と、渡航先での1地点への上陸において、「アジア大陸」への一步を感じ、そこから遙か彼方にあるはずの「欧洲大陸」をもみずからの目に思い描いてしまうのです。

わたしはこうした高商生の大陸気分を、大陸への興奮と表現したことがあります¹³⁾。この興奮はさきにみたとおり、小さな日本というコンプレクスにもつながりますが、それを反転させるとともに大陸気分にあわせて膨張させれば、「我が活動舞台の大なるを狂喜」することもできるのです。ここには葛藤があります。いわば日本コンプレクスという心象をうまく反転させられるかどうか——それをひとりの高商生は、「国民と国土の風景」という言葉を用いてうまくあらわしました。その文面はつぎのとおりです。

殊に三日間の船中生活から、祖国(少らくではあるが海外に行つてみたものの云ひたい様な言葉を用ひて)の風景を海の上から、乃ちその外側から眺めるにつけて、その内側に潜んである、日本現代の生活と日本人の性情とが、いかに甚だしく日本的美しい風景をその趣を異にしてあるか、新しい日本人が経営する、新しい都会の生活には、日本の江湾と山岳とによつて印象されるやうな、可憐、美麗、真美なる何物が見出されるであらうか／私は美しい山や川の自然が与へて呉れる恩恵に、もつと気持の強い身体の大きい国民の風景が欲しい、調和した自然と人とが欲しい／乱雑な都会市民と市吏と警察吏とが、豹変^[判読不能]□い新聞記事から脱して、美しい環境に恵まれる、美しい人となりた

いから、国民と国土の風景とが、何等の関係もなく、余りに別々であることを不審に思ふから、一九二七 八、八 [1927年、田中敏博「満鮮合体観」]

——海外との対比で日本をみると、そこには一方に太古より未来永劫に不変の美としてつづく自然があり、もう一方にその美にふさわしくあるべき時代の様相としての国民と国土がある、広大無辺な大陸と照らしたとき、その国民と国土は強く大きくなくてはならないとの議論は、十代にして海外を体験した高商生の精一杯の煩悶をあらわしているように

13) 阿部安成「大陸に興奮する修学旅行—山口高等商業学校がゆく「満韓支」「鮮満支」」(『中国21』第29号、2008年3月)を参照。

わたしにはみえます。帝国を担う一員としての高商生の心象と心性のあらわれです。

■この、わたしが煩悶と呼んだ、海外修学旅行を体験した高商生の心象風景を、もっともうまく整えた図像が、吉田初三郎の鳥瞰図だと考えます¹⁴⁾。初三郎式鳥瞰図も、20世紀前半のツーリズムと並走する時代の小さな、しかし数多く流通した象徴としてありました。アウトライン=輪郭に縁取られた風景は、対象を一望する目によってとらえられ、しかも、対象をみつめるその広角の目は、遙か遠くをみつめるとともに、アウトラインのなかでできるかぎりの風景をおさめるために、島も半島も列島も大陸も大きく湾曲させてしまうのです。「一望」を英語におきかえると、bird's-eye view となります。まさに鳥瞰なのです。初三郎式鳥瞰図も、1つの位置にある目から、遙か遠くを見はるかし、かつ、対象を捻じ曲げてでもみずからの視界におさめてしまうのです。

いま、細かな、緻密な議論をすつとばしてしまうと、この初三郎式鳥瞰図は、20世紀前期の帝国日本をあらわすもっとも彩あざやかな図像であり、それは対象を描くものの身勝手さをもあらわし（勝手に、実態と異なって、描く対象を捻じ曲げてしまうのですから）、やがては消えてしまう時代の構図なのだとおもいます。初三郎は外地だけでなく、もちろん内地も描き、グロテスクなまでに湾曲させた日本列島も描きます。

初三郎が描く鳥瞰図と、海外修学旅行を体験した高商生の心象風景となった、あるべき「国民と国土の風景」がわたしには重なりあってみえます。

このわたしの対象にむきあう感覚を、きちんと歴史のなかにおいてみるのが、歴史研

14) 講演会での質疑応答でこの点について、これはひらめきなのか、とフロアから尋ねられ、少し照れくさかったため、小松左京作の『日本沈没』上下（光文社、1973年）において日本沈没の兆候を発見した田所博士が渡老人から「科学者にとって、一番大切なことは何か？」と問われ「カンです」と応えたこと、また特殊工作船よしの船内のD計画総司令室で日本沈没の仕組みを初めて田所博士が説明するところで「先生は過去のデータの延長では予測できないことを、どうやって、予測しようとなさるのですか？」と問われた田所が「直観とイマジネーションだ」と叫んだことを引いて（わたしは講演会でこの2つを混同していた）、そのようなものだと答えたが、じつはただの勘ではなく、講演準備で少しは周到に考えたすえの提起だった。ある図像を歴史のなかできちんと読むことがわたしの研究課題の1つであり、それもあって、講演開始直前の講師紹介で司会の杉岳志さんにはわたしの旧稿「絵巻のうへのアマテラス」（『思想』第912号、2000年6月）も示していただいた。この観点や論点は重要で、論述の展開をもっと精緻にする必要があるとおもっている。

研究者としてのわたしが高商を考えるときの課題となります。その成果がきちんと出せたとき、かつての高等商業学校という教育装置があらたな姿をあらわすようにおもいます。そのみとおしをここで仮にのべておくと、20世紀前期に主要な性格を備えて登場した高等商業学校とは、その時代に展開した *asianization*——グローバリゼーションのアジア版であるアジアニゼーションの動向と動態を支え、その展開を担った1つの装置ではないか、ということになります。ここにいうアジアニゼーションとは、アジア化というよりも、アジアに細胞のようなネットワークができてゆくようすを想定しています¹⁵⁾。ここに高商が担った実学や実業がかかわってきますし、この業や学をめぐる変動は日本だけ、アジアだけの現象や事態にとどまらず、ほぼ同時代のヨーロッパでも展開していた世界史の一面だったとおもいます¹⁶⁾。

帝国化してゆく近代国民国家としての日本における実業=実学を担う高等教育機関としての高商は、世界史というフィールドでの同時代性と、その運営が展開する東アジアという方向性を帯び、そのときの1つの実践場として高商の海外修学旅行があった、とわたしは考えます。

[附記] 11月2日の一橋大学附属図書館でのこの講演会の場において、わたしたちの研究会のメンバーのひとりであり、わたしの同僚でもある坂野鉄也から2点の教示を得た。

1つは、講演会終了後の西行する新幹線車中からのメールによる、「一望俯瞰が持つ権力

¹⁵⁾ ここにいう *asianization* は厳密には *east asianization* であり、本文の「アジア」は「東アジア」としたほうが適切かもしれない。今後の検討課題とする。またこうしたアジアニゼーションの1つの装置として高商をとらえようとする提起に対して、高商で展開した会計学や法学を無視するのといった反発が予想されるが、わたしの議論は高商の1つの側面、これまでほとんど研究されることのなかった領域を提示しているにすぎない。高商の会計学、高商の法学もそれぞれに議論すればよいだけのこと。

¹⁶⁾ ドイツ、イギリス、ベルギーなどの動向は、西沢保「世紀転換期における高等商業教育運動をめぐって—飯田、関、福田の留学を中心に」（『経済学雑誌』第88巻第1号、1987年5月）を参照。なお本文に記した「ヨーロッパ」はひとまずの用語で、「ヨーロッパとアメリカ」でも「欧米」でもよかった。どういう場を設定するかの考察を先送りした便宜上の用語である。

性」について E.レヴィナスを参照せよ、という教え。これは、このところの彼の公務を知るものとして、役得？というか役ならではのというか、そういう仕事の活用法としてありがたく教示を頂戴した。

2 つめは、高商の同時代性を考えるときのフィールドに「ラテンアメリカ」をくわえよ、との指摘。これは彼自身の専門研究領域とのかかわりで彼ならではの観点であり、またおなじ高商研究をおこなうものとして、彼に担っていただき今後の展開を期待する論点である。坂野の指摘をまとめると、19世紀末からの世紀転換期にハワイなどへの出稼ぎ移民がメキシコ、ペルー、ブラジルへの移民にかわり、また、1930年代の恐慌期から第二次世界大戦時そして戦後へとかけての消費市場、鉱物や原油などの原産地、移民先としてのラテンアメリカがあり、こうした動向に高商を位置づけることの必要性を説いたとなろう。

ラテンアメリカという観点で高商を考えようとするとき、神戸高商の最後の校長だった田崎慎治に坂野は注目する。詳細はいずれ発表されるだろう彼の論考を待つとしよう。

この講演は、一橋大学附属図書館専門助手の杉岳志さんの尽力によって実現した。会場の一橋大学附属図書館大閲覧室には、10年以上の間をあけて久しぶりに入った。かつて大学院生として、また、助手（当時の呼び名は特研究生）として一橋大学に在籍していたときはそれぞれに研究室があったので、ほとんどこの大閲覧室で作業をすることはなかった。それでもいどこかこの机にむかって数時間を過ごしたことがあったようにおもう。学問の場としての大学にふさわしい図書館閲覧室が懐かしかったし、かつてのようすが残っていることもうれしかった。いまでもここは閲覧、勉強のために使われていると聞いた。

講演後の質疑応答で、一橋大学附属図書館の江夏由樹館長から、東京高商の海外修学旅行はどうかと尋ねられた。一橋で講演するのに東京高商の話題がないのはまずかったかと当日の講演直前に気になったが、わたしの手元に史料がなくどうにもならなかった。今度どれだけ調べられるかわからないが、わたしが担わずとも、一橋の教員や院生がどんどん史料を活用してその成果を発信すればよいとおもう。一橋では福田徳三研究会があって、同会の HP では「本研究会で取り上げる内容は多岐に互ります。現在は、福田徳三

研究を通して、一橋大学の学問伝統・学問史を研究する会に発展しています」との自己紹介がみえる。わたしもこの第5回研究会（2009年10月26日）で「滋賀大学経済経営研究所所蔵“旧制彦根高等商業学校関係資料”の保存と公開と活用について」の論題で報告する機会を与えられた。

講演会終了直後に、かつて一橋大学附属図書館につとめておられた方とちょっとした話をする時間があった。わたしが大学院生だったときにカウンターにいらっしやったことを覚えている方だった。こうした機会をととてもうれしく感じた。

写真説明

2 ページ：長崎中華街の雑貨店「泰安洋行」（2008年5月10日撮影）。

4 ページ：滋賀大学経済学部講堂。竣工は彦根高商第1回入学式開催と同じ1923年（2005年3月13日撮影）。

12 ページ：彦根高商の卒業アルバム（『PRO MEMORIA 1929』）からキャプション「海外旅行」。